



高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156
<http://takashima-tojukai.com/>

村井弦齋の

『近江聖人』について

東洋大学名誉教授 吉田公平



村井弦齋の『近江聖人』は明治二十五年十月十六日に博文館から発行された。村井弦齋

二十九歳の時である。編修兼発行人は大橋新太郎。博文館のオーナーである。「諸名家編著、少年文学」三十二冊の内の十四編である。定価十二銭。小生の手元にあるのは大正二年四月十五日発行の十二版である。売れに売れた。博文館の出版活動は最も旺盛な時期であった。小生の掌中にある『近江聖人』の表紙裏に「木村光徳」という署名がある。中江藤樹の研究に謹しまれ、日本藤樹学会を再建されて熱心に顕彰活動をされた先生である。木村光徳先生は広島県呉市にお住まいであった。高等学校の先生を務めながら中江藤樹にゆかりのある地域に資料調査に出かけられて精力的に研究を進められた。先生の研究成果としては大著が二冊ある。小生が広島大学に赴任したことが機縁となつて教を乞う

た。その先生の署名入りの『近江聖人』が落掌したのは、先生に直接いただいたのか、或いは古書店で入手したのか、今は忘れてしまった。

『近江聖人』は目次はないが、次の五章からなる。「輝あひかり(お痛はしや)」「習わぬ度(母の為)」「孝の徳(人を化する)」「聖人様(生きた神様だ)」「王者の師(上に屈せず下に驕おごらず)」。総頁は百四十三。紆余曲折の後、輝膏葉を入手する過程、母親に出合いながら母に諭されて大洲に帰る経緯、熊沢蕃山の入門の逸話など、中江藤樹を語る時の山場が見事に構成されている。『近江聖人』の基調は輝膏葉である。読者はこの逸話に魅せられた。村井弦齋は読者の心をつかむ名人であった。しかし、この輝膏葉の逸話は村井弦齋の創作である。中江藤樹の年譜などには輝膏葉の逸話は全く無い。かつて高島市で講演を依頼された時に、後の懇親会では村井弦齋の創作ですよとお話したところ、ご高齢の方が「でも、私も、あの輝膏葉の逸話に感動して、中江藤樹先生をお慕いするようにになりました」と述べられた。大方の読者も同じ様に感動したに違いない。

村井弦齋は一八六三年(文久三)十二月十八日に三河国豊橋に生まれ

た。一九二七年(昭和二)に七月三十日に逝去した。享年六十五歳。

村井弦齋は多芸の人であった。一所に留まる事ない。随処に主となり八面六臂はちめんろっぴの活躍をした。矢野龍溪に見出されて報知新聞などで編集執筆に敏腕を振るった。『近江聖人』は多くの読者をつかんだが、村井弦齋の主著ではない。沢山の著書の中で、さて主著と問われれば『食道楽』であろうか。明治三十六年刊行。売れに売れた。今その復刻版が柴田書店から刊行されている。村井弦齋は百道楽を期したが『女道楽』『酒道楽』『釣道楽』などに終わった。村井弦齋の評伝には黒岩比佐子『食道楽』の人村井弦齋がある。好著である。



お知らせ

藤樹研究の第一人者である吉田公平先生のご厚意で、寄稿いただきました。次号からは、「吉田公平先生のコラム」として連載して参ります。お楽しみにしてください。